

# アイルランドおよびイギリスの伝承文学における 「異界」の定義について

高木 朝子<sup>1\*</sup>

## The Definition of “the Other World” on Irish and British Oral Literature

Tomoko Takaki<sup>1\*</sup>

The other world on Irish folktales can be found as habitats of supernatural beings or the world where such beings exist. Ireland has not only its rich oral traditions among the ordinary people but also medieval manuscripts written by Christian monks that include mythical and hero tales, the stories of saints’ pilgrimages over the seas, geographical descriptions, laws and so on. Both of the Irish treasure provide us various unique and diverse descriptions of the other world, mythical gods/goddesses, and fairies. The author has been researching on Irish and British oral literatures to clarify the concept of the other world, picking up the examples of the tales and classifying them. Reading the preceding researches made me notice that the definition of the word “other world” was not always same or clear. Before the research proceeds, it is indispensable to make the definition of the “other world” clear at first. The purpose of this report is to clarify the definition of the word “other world” through several preceding researches.

キーワード：異界、アイルランド民話、イギリス伝承文学

Keywords：other world, otherworld, Irish folktales, British oral literature

### 1. 序

アイルランド民話における異界は、民話に登場する超自然的なもののいる世界、それらが住んでいる世界として見つけることができる。アイルランドには人々が語り継いできた豊富な民話とともに、中世に隆盛した修道院文化の頃に多く書き記された当時の物語があり、そこには神話の神々や英雄たちの話、聖人の航海譚などがあり、語利継がれてきた様々な異界が現代まで残っている。それらはまさに異界描写の宝庫であると言っても過言ではない。著者は、アイルランド、およびイギリスのケルト系言語・文化を有する地域であるスコットランドやウェールズの伝承文学における、前述のような豊富な描写を持つ異界観について、文献にあたりながら網羅的に明らかにしていきたいと考えている。

そのために、まずは「異界」とは何なのかについて、定義をある程度明確に確認しておく必要がある。よって本報告の目的は、先行研究における「異界」の定義を確認

し、明らかにすることである。このため、まず日本語における「異界」の定義を確認し、次に英語の“the other world”の定義を確認していく。それにより、伝承文学における異界観をより明確に提示し得るための礎としたい。

### 2. 「異界」の定義

「異界」という言葉は“the other world”の訳語であるが、日本で「異界」と言えば比較的近年になってから使われるようになったもので、それまでは幻想文学やファンタジー系の児童文学の研究分野では馴染みのない用語であった。<sup>(1)</sup> その言葉の概念としては「死後の世界」という意味と、現実の世界とは異なる「別世界」という意味の2つがあり、その用法は混在している。前者を「他界」、後者を「異界」と呼ぶこともでき、日本でまずこれらの概念に言及した折口は、「異界」という言葉は使っていないものの、現実としての「べつのくに」「べつのさと」が「他（他国・他郷）」であり、空想としてのそれが「異（異国・異郷）」であるとした。<sup>(2)</sup>

現代異界研究を牽引する小松は「異界」の定義として、「私たちの世界」、すなわち、人々の日常世界、日常生活

<sup>1</sup> リベラルアーツ系  
〒861-1102 熊本県合志市須屋 2659-2  
Faculty of Liberal Arts  
2659-2 Suya, Koshi-shi, Kumamoto, Japan 861-1102

\* Corresponding author:  
E-mail address: t-takaki@kumamoto-nct.ac.jp (T. Takaki).

の外側にあると考えられている世界・領域のことであるとし、死後の世界を意味する「他界」「あの世」といった概念は、広義の「異界」に内包されるとしている。そして留意しなければならない点として、異界とはあくまでも相対的な概念であり、空間的なニュアンスが強く、時間的な性格をもったものも含まれることを挙げている。<sup>(3)</sup>

辞書における「異界」の定義については、池原によると、立項されているものでは以下のような説明となっている。<sup>(4)</sup>

「人類学や民俗学での用語。疎遠で不気味な世界のこと。亡霊や鬼が生きる世界」(『大辞林 第二版』、1995)  
「日常生活の場所と時間の外側にある世界。また、ある社会の外にある世界」(『日本国語大辞典 第二版』、2000)

「日常の世界とへだてられた幻想的な世界」(『三省堂国語辞典 第六版』、2008)

日本語大辞典第二版と三省堂国語辞典第六版の定義は類似しているが、大辞林第二版は、人類学や民俗学の用語と限定している点や、語義の点でも異なっている。これらの辞書の他には「異界」について立項されていない辞書も多く、この言葉の明確な定義やその使用はまだ定着していないと言えるだろう。

パッチの『異界』(1950)を翻訳した黒瀬もその訳者のことばで、“the other world”の訳語の選択についての苦悩を以下のように書いている。<sup>(5)</sup>

本書が表題として掲げた「異界」なる訳語について私見を述べると、原語のジ・アザー・ワールドなる英語は、「来世」のほかにも「彼岸」、「冥界」、「冥府」、「黄泉の国」、「別世界」、「天国」、「極楽」、「浄土」などの種々の訳語が考えられ、また原著の扱う内容が必ずしも死後の世界のみ限定されず、現実の世界で人々の夢見る理想の楽園をも含むことは事実である。しかし、東洋のわれわれの感覚に最も親しみやすい言葉は、やはり「来世」であり、また多くの英和辞典に共通する一般的訳語も「来世」になっているので、死後において訪れる楽園という観念がすべてに勝る内容をなす事実も踏まえて、あえて本文では「異界」に統一することはせず、適宜「来世」「冥府」「別世界」「異界」等訳し分けた。

黒瀬の言うように、英和辞典の *other world* の訳語は「死

後の世界、あの世、来世；別世界」(ランダムハウス英和大辞典第二版)、「来世、あの世；空想の世界」(リーダーズ英和辞典第2版)、「来世、あの世：想像の世界」(ジージアス英和大辞典)などとなっていて、まず「来世」、そして「あの世」「死後の世界」が訳語として先に示され、次に「空想・想像の世界」「別世界」と言う意味が続いている。明確な説明とは言えないが、英和辞典においても、“the other world”はこうした「死後の世界」と「空想の別世界」の意味の両方を内包している言葉であり、どちらか一方だけでは不完全なので、訳語として両方を含む言葉、つまり「異界」が必要だと言える。

以上より、日本語の「異界」の定義としては、小松が定義として述べているように、「死後の世界」と「空想の別世界」の両方の意味を含む、より広義の言葉であると言える。

### 3. “the other world”の定義

次に“the other world”の定義について確認していく。英語の辞書における定義について、*Oxford English Dictionary* のものを確認すると以下の通りである。

#### **other world, other-world, (Also otherworld)**

##### 1. A world other than this:

- a. The world to come, the world beyond the grave.
- b. The spirit-land of many non-Christian peoples.
- c. The world of idealism, poetry, or romance; also more gen., a range of experiences conceived in imagination or fantasy as lying outside the world as normally known.

##### 2. attrib. Pertaining or relating to the other world; unearthly; heavenly.<sup>(6)</sup>

1番の名詞「この世界以外の世界」という意味では、古くは17世紀初頭から使われ始めている。1番の3つの意味を簡単に言えば、aは死後の世界、bは非キリスト教徒の精神世界、cは普通の世界の外側にある空想の世界ということになる。日本語の「異界」の定義と同様、死後の世界と空想の世界という2つの概念がaとcで定義されているが、さらにbでは宗教的側面からの説明も加わっている。bの「多くの非キリスト教徒の精神世界」に関しては、ケルト学の研究やアイルランドの民俗学からの定義も確認することとする。

まずはパッチが著書『異界』の「第二章 ケルト民族における異界」の最初に、アイルランドの中世写本に残さ

れた文献における異界観の総括を次のように述べている。

古典文学に見られる異界の観念とケルト民族の異界観との間には類似点が多い。数例を挙げれば、長い船旅ののち辿り着く幸せな者の住む群島、聖なる山、黄泉の国などがある。しかし違っているのは、これらすべてがギリシア・ラテンの類例には認められない、極めて個性的な特色を帯び、ケルト独自の空想性をふんだんに示す事実である。記述が死者の住処、神々の館、地上の楽園のいずれに属するかは問題にならない。また、これら三つの観念がどう交錯するか、それぞれの観念がいかなる特殊起源をもつかについても、ここで考察すべき必要を認めない。(…)死すべき者は、あるいは神に召され、あるいは厳めしい異界の住人に召されて、この国に至る。エリジウムを求める者はその地に旅立ち、死者の霊もまたここに向かった。<sup>(7)</sup>

古典文学とはギリシア・ラテン文学のことであり、ケルト民族の異界観とは、アイルランド中世文学に描かれている異界観ということになる。パッチはこれらと比較して考察するとともに、「死者の住処、神々の館、地上の楽園のいずれに属するか」はこの著書では問題にしておらず、つまりそれらすべてを「異界」とみなして分析している。アイルランド中世文学とは、8世紀から12世紀頃に、キリスト教修道士たちが書き記した写本で、王族や騎士などの上流階級の集いの場で、詩人によって語られていた口承物語から当時の法律まで様々なことが綴られている。

次に、ケルト研究分野の研究者の異界の定義を見る。ケルト研究とは、アイルランド、ウェールズ、スコットランド、ブルターニュなどケルト系言語・文化を持つ地域すべての研究を指す。

ウェールズ大学教授でケルト学の権威であるグリーンは『ケルト神話・伝説事典』の「異界 (otherworld)」の項で次のように書いている。

あらゆる種類の証拠-ギリシア・ローマの作家の書き残したものの、土地固有の神話、考古学-はケルトには来世に対する強い信念があったことを示している。ガリアのドルイドは、霊魂は不滅だと教え、そこには霊魂の輪廻の概念があった。食べ物、飲み物、その他の用具がたくさん副葬された鉄器時代の墓は、死者に

は来世でそれらが必要だと信じられていたことを実証している。ウェールズとアイルランドの土着の伝説は、異界についてのケルト的な考え方に肉付けをしている。ウェールズではアンヌウヴンと呼ばれ、アイルランドには一連のシー(土塚)があった。この異界は流動的であいまいな場所で、空間的な境界を超えていた。たとえば、それは西の海の、1つまたは複数の島にあると考えられたり、また「ブランの航海」では大海の下か塚の下にあると考えられたりした。アイルランドのシーは、ダーナ神族が住んでいるところで、アイルランドの国土の地下にあった。<sup>(8)</sup>

グリーンの説明においても、異界は死者の世界であり、また神話の神々や妖精のいる別世界でもあるという2つの面がある。死者の世界については、ケルト民族の霊魂の輪廻の考え方が影響していると述べているが、死しても尚別世界で生き続けるので、そのための道具を墓に副葬品として入れるという考えは、ガリアだけでなくアイルランドにも伝わっていて、同様の考え方をしていたことが分かっている。<sup>(9)</sup>

アメリカのケルト学・アイルランド語の学者であるマキロップは、*Oxford Dictionary of Celtic Mythology* (1998)の“Otherworld”の項で次のように説明している。

**Otherworld, otherworld.** A realm beyond the senses, usually a delightful place, not knowable to ordinary mortals without an invitation from a denizen; the Celtic Otherworld sometimes subsumes the Mediterranean concept of the underworld, i.e. the realm of the dead. Evidence from all areas of Celtic culture, from ancient to all the vernaculars, demonstrates a belief in life materially surviving the expiration of the body.<sup>(10)</sup>

説明では、異界は「通常感覚を超えた世界で、楽しい場所であるが、その住人に招かれなければ知ることはできない場所」であり、ケルトの異界は時々、地中海地方の地下世界の概念(例えば死者の国)を包括するという。そして古来より肉体が減んだのちも生き続けるという信仰を示す証拠がケルト文化を有する地域では確認できるとしており、このことは前述のグリーンも述べている。これらは輪廻というより霊魂の不滅とも言える考え方であり、死後の世界という遠い感覚よりは、地下世界で肉体もそのままに生き続けるということに近かったようである。

続いて、ドイツのケルト学の権威であるマイヤーは、著書『ケルト事典』の中で、「異界」の項目を次のように説明している。

特にケルト人を扱った一般図書において、ケルト人の思い描く妖精の世界を指す。英語の *otherworld* の借用翻訳語であり、目に見える《この》世界とその向こう側にある《他の》世界の対立というキリスト教的な世界観に基づくものである。ケルト人 [の世界観] にもこの対立は反映している。例：アイルランド語ケンタル *centar*=この世/アルタル *altar*=あの世、イーシウ *i-siu*=こちら/イータル *i-thall*=向こう。これらはむしろキリスト教的文脈においてのみ使われた。これに対して霊 [魂] の世界は、アイルランド語でシード、ウェールズ語でアンヌヴンと称された。ローマの詩人ルカヌスによると、ドルイドは死者の魂が《*orbe alio*》で生き続けると信じていた (『ファルサリア』1-457)。(11)

マイヤーの説明の「目に見える《この》世界とその向こう側にある《他の》世界の対立というキリスト教的な世界観に基づくもの」という部分は、*Oxford English Dictionary* の 1-b. の「非キリスト教徒の精神世界」を詳しく説明しているものと位置付けられる。また、小松が言っている異界とは相対的な概念であるという点も、マイヤーの説明と共通するところがある。さらに、マイヤーは最初に異界のことを「ケルト人の思い描く妖精の世界を指す」と述べている。死者の世界ではなく、妖精の世界としているところは、今までは「空想の世界」「別世界」とされていた部分であり、マイヤーの説明には「霊 [魂] の世界」という説明はあるものの「死者の世界」とは言及されていないところにも注目したい。

最後に、アイルランド民俗学の権威である Ó hÓgáin は、著書 *The Lore of Ireland* (2006) の“*fairies*”の項で次のように述べている。

*fairies* (in Irish, *sí*) The otherworld community that, according to Irish folklore, inhabits the landscape side by side with, but usually invisible to, the human race. (12)

Ó hÓgáin による“*the other world*”の定義の言及は見つけられなかったが、マイヤーと同様に妖精 (*fairies*) が異界の住人であるとし、またそれらはアイルランド民俗学によると、アイルランドの風景のいたるところに住んでいるが、たいてい人の目には見えないとしている。

ここまで“*the other world*”の定義や説明を見てきたが、「死者の世界」と「空想の別世界・楽園」の2つについては日本語の「異界」の定義と類似している。一方、キリスト教的視点から見た「異教的な精神世界」または「神々や妖精の世界」という3つ目の概念がこの“*the other world*”の定義には含まれていると言える。これはまさに著者が明らかにしようとしているケルト的異界観とも言える側面である。

#### 4. 結び

アイルランドやイギリスのケルト系言語・文化地域の伝承文学における異界観について分析するため、「異界」という捉え難い言葉の定義を明確にするよう努めた。日本語の「異界」の定義は、「死後の世界」と「空想の別世界」の両方の意味を含む広義の言葉であり、英語での“*the other world*”の定義ではそれら2つに加え「異教的な精神世界・神々や妖精の世界」という概念が加わっていることが確認できた。これにより、今後異界観を分析していく中で、その結果をより明確に示し、これらの先行研究の言及にも対照しつつ具体的に提示し得るものと考え

(令和3年10月11日受付)

(令和3年12月24日受理)

#### 参考文献

- (1) 小松和彦, 小松和彦編:「日本人の異界観」, p.5, せりか書房 (2006).
- (2) 折口信夫:「折口信夫全集」, p.20, 中央公論新社(1996, 初出 1916).
- (3) 小松和彦, 小松和彦編:「日本人の異界観」, pp.5-7, せりか書房 (2006).
- (4) 池原陽斎:「「異界」の意味領域-〈述語〉のゆれをめぐって-」, 東洋大学人間科学総合研究所紀要, 第13号 pp.51-52 (2011).
- (5) 黒瀬保, バッチ, ハワード・ロリン著, 黒瀬保ら訳:「異界 中世ヨーロッパの夢と幻想」, p.ii, 三省堂 (1983).
- (6) Oxford University Press: “*Oxford English Dictionary*,” Second edition (1989).
- (7) バッチ, ハワード・ロリン(1983, 原典 1950), p.30.
- (8) グリーン, ミランダ・J, 井村君江ら訳「ケルト神話・伝説事典」, p.46, 東京書籍(2006).
- (9) Ó hÓgáin, Dáithí: “*The Lore of Ireland: An Encyclopaedia of Myth, Legend and Romance*.” p.206, The Collins Press (2006).
- (10) Mackillop, James: “*The Oxford Dictionary of Celtic Mythology*.” P.359, Oxford University Press (1998).
- (11) マイヤー, ベルンハルト, 平島直一郎訳「ケルト事典」, p.25, 東京書籍(2006).
- (12) Ó hÓgáin, Dáithí: “*The Lore of Ireland: An Encyclopaedia of Myth, Legend and Romance*.” p.206, The Collins Press (2006).